

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：32705

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320061

研究課題名(和文)科学の知と文学・芸術の想像力—ドイツ語圏世紀転換期の文化についての総合的研究

研究課題名(英文)Scientific Knowledge and Imaginational Power in Literature and the Arts. An Interdisciplinary Research about the Culture of German-Speaking Countries around 1900

研究代表者

鍛冶 哲郎 (Kaji, Tetsuro)

鎌倉女子大学・教育学部・教授

研究者番号：30135818

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,200,000円

研究成果の概要(和文)：「科学の知と文学・芸術の想像力」というテーマのもとに、おもに19世紀後半から20世紀初めにかけてのドイツ語圏の文学と芸術を再検討することによって、この時代の美的想像力および広く文化的表象に対して、発展しつつある科学・学問の新たな発見が果たした役割を具体的に解明することができた。とくに精神医学・心理学、生理学・医学、生物学の知見が人間の捉え方や描写の仕方あるいは芸術上の理論構成に与えた影響について、所期の目的通りに確認できた。

研究成果の概要(英文)：Through a re-evaluation of the literature and arts within the culture of German-speaking countries in the second half of the 19th century and in the beginning of the 20th century the influence of the rapidly growing science on aesthetical imagination was investigated and explicated in various fields of academic research. Especially concerning the influence of new theories of psychiatry/psychology, physiology/medicine and biology on the understanding and the methods of description of humans and theoretical concepts in the arts, the assumptions made in the beginning of the project could be confirmed.

研究分野：ドイツ近現代の文学と思想

キーワード：文化学 生理学史 精神医学史 生物学史 文学論 科学技術 芸術論 独文学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 21 年度から 23 年度まで実施された「陶酔と技術 ドイツ語圏世紀転換期における文学・芸術史についての総合的研究(基盤研究(B))」の成果を受けて立ち上げられたものである。前回のプロジェクトの終盤において、「陶酔」は身体、感覚、精神に対する新たな知見や見方と切り離すことができず、また「技術」は学問的基盤を持つがゆえに、当時の科学と学問の進展に着目して、それとの関連で、文学、芸術、思想を読み解くことの必要性が課題として浮上してきた。

2. 研究の目的

19 世紀後半から 20 世紀初めのヨーロッパにおいて目覚ましい発展を遂げた科学・学問が、時代の前衛的な文学、芸術、思想に及ぼした影響については、文学史上の自然主義に関しては指摘されてきたが、広く時代の文化を視野に収めた研究は稀であった。本研究は、ジャンルを超えて新たな表現と思想が模索された世紀転換期のドイツ語圏を対象として、とりわけ人間の生物性、心的機構、知覚感覚に関する学問の展開に着目して、この時代の文学、芸術、思想を再検討しようとする試みである。

3. 研究の方法

研究会とシンポジウム、講演会の開催を通して目的の達成に努める。分担者は専門に近い他の分担者と頻りに意見交換を頻りに行いつつ、本科研主催の研究会やシンポジウムにおいて、またそれぞれの所属学会や学内研究紀要などにおいて本研究テーマとの関連した研究成果を発表する。

4. 研究成果

初年度は、7 月 21 日に全員による最初の研究集会を開催し、市野川がヴィルヘルム・グリーンガーの精神医学を紹介しながら 19 世紀半ばから 20 世紀にいたる医学や生理学と精神医学との関係について、また鍛冶がゴットフリート・ベンの文学と生物学について発表を行った後、二つの発表をもとに自然科学の知識と文学・芸術の表現形式および内容との時代的平行性、影響関係について議論を交わし、本プロジェクトの皮切りとした。12 月には、田中が企画した「ムネモシュネ・アトラス展 アビ・ヴァールブルクによるイメージの宇宙」に共催者として協力した。この展覧会は、古代から同時代に渡るヨーロッパの記憶の集積を一定のイメージとして構成しようとするヴァールブルクによる試みを、今日に再現してみせた画期的な企画である。ヴァールブルク自身世紀転換期を生きた学者であったが、彼によって選択されたイメージを広く同時代の文化との関連のなかにおいて検討する機会が与えられ、多くの示唆を与えることができた。3 月 18 日には石原あえかが主催して、学外から壇原宏文(北里大学)、

横山千晶(慶應大学)の両氏を招いて、コロキウム「医学と芸術 近代皮膚科における教材と日独学術交流」を開催した。世紀転換期の衛生学の有り様、病の表象の仕方、ドイツからのムラージュの受容と日本のムラージュに見られる独創性など、多様な観点からドイツとヨーロッパの医学と芸術表現の結びつきについての斬新な発表と活発な議論を通して、今日までほとんど顧みられてこなかった医学標本・病気の表象を巡るヨーロッパとドイツ語圏での実情および日本との交流の様子が明らかにされた。

平成 25 年度は 9 月 17 日に来日中のドイツのギーセン大学教授ウーヴェ・ヴィルト氏による講演会「黄金の壺 化学と狂気のあいだの筆写の場面」を開催し、講演終了後に 19 世紀前半のロマン主義の時代における自然科学と文学と心の相互関係についての議論を行った。これによって 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての心に関する科学が芸術に対して持った意義を検討する際の前史をおさえることができた。12 月 7 日には南山大学地域研究センター共同研究「19~20 世紀のヨーロッパにおける科学と文学との関係」グループ(代表者:真野倫平教授)と共催で東京大学駒場キャンパスにおいてシンポジウム「科学知の詩学 19~20 世紀のドイツ・フランスにおける科学と文学・芸術」を開催した。鍛冶、竹峰、石原が発表を行い、他の研究分担者も司会とコメンテータとして議論に積極的に参加した。南山大学の研究会メンバーからは、フランスでの科学と芸術のつながりについての発表があり、議論を通じて本研究課題をヨーロッパ的な脈絡の中に位置づけ、その重要性を確認することができた。25 年度の研究課題と関連することとして、心霊学がドイツとフランスの文学・芸術にとって果たした役割を具体的に指摘できたことは大きな成果であった。この催しには学内外から 50 名を超える参加者があった。3 月 17 日には哲学・科学史研究者である金森修氏を迎えて講演会「19 世紀ヨーロッパにおける人工世界の表象 シャルル・バルバラの『ウィティントン少佐』を中心に」を開催した。この講演会においては、フランスの 19 世紀の小説の詳細な分析によって、文学的想像力による人工的世界の表象が当時の科学技術の発達をもとにしてきた経緯を事細かに知ることができただけでなく、自動人形と人間の特質を比較しつつ、心の問題について有益な議論がなされた。

26 年度は最終年度に当たるため、過去 2 年間で十分に掘り下げられなかったテーマを中心に研究活動を行った。10 月 18 日にはミュンヘン大学のイザベル・クランツ博士による講演会「言葉のない言語、メディアのない世界:ノスタルジックなコードとしての花の言語」を開催し、終了後の討論会で植物学あるいは植物についての知識が 19 世紀と 20 世紀のヨーロッパの文芸と市民文化のなかで果

たした意義を確認した。11月1日の研究発表会では、高橋宗五がプレヒトの演劇論と演出ノートをもとに量子力学の知見との類似性について論じた。また梶谷真司はヘルマン・パウジンガーの民俗学を紹介しつつ、生活世界のなかで科学・技術が民俗化され、民俗が科学・技術化される様子を幅広い文化現象として跡付けた。12月6日には長木誠司とヘルマン・ゴチェフスキが中心となって「物理・生理・心理 三学を交差する音楽論 19世紀から20世紀初頭までの科学史をめぐって」を開催した。音楽と科学の発達との関係は未検討の分野であったが、この時代のドイツ、フランス、ベルギーにおいて、音楽の理論が生理学や音響学さらには精神医学や心理学から何を学び、それらとどのような関係を結んでいたかが、フランソワ・ジョセフ・フェティスやヘルマン・ホルムヘルツらの理論を詳細に検討しつつ明らかにされた。3月7日の佐藤恵子の研究発表「ヘッケル一元論の想像力」では、日本では部分的にしか知られていないエルンスト・ヘッケルの生物学と思想上の業績が、19世紀の学問的伝統と文化との関連を交えて詳細に紹介された。引き続いてヘッケルの同時代のなかでの位置づけについて、および19世紀と20世紀初頭における生物学上の発見と文明論の相互影響関係をめぐって活発な議論を交わした。

以上のように3年間の研究を通して、世紀転換期ドイツ語圏の文学・芸術の新たな試みがどのように当時の学問・科学の知見によって触発されたかを、様々な領域において明らかにすることができた。また、本プロジェクトが当初想定していなかったことだが、フランス語圏に関する同様の研究グループとの生産的な共同企画、および日独の学問文化の交流についての研究成果が生まれたことも大きな収穫だった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 45 件)

市野川容孝、近代化という概念と日本の社会学、現代思想、査読無、Vol.42-16、2014、124-138

田中純、キンポウゲを摘むベンヤミンー
ジゼル・フロイントの一枚の写真について、UP、査読無、506号、2014、50-57

石原あえか、近代医学と人形 ドレスデン国際衛生博覧会(1911)に出展された日本の生人形と節句人形、言語・情報・テキスト、査読無、Vol.21、2014、29-42

竹峰義和、映画都市ベルリンドイツ映画小史一八九五 二〇一四、紫明、査読無、第36号、2015、11-15

竹峰義和、Beschwörung der filmischen Gespenster: Zur Theodor W. Adornos Reflexionen über technische Medien、

言語・情報・テキスト、査読無、第21号、2014、1-13

田中純、過去に触れるーホイジンガの秋、ヴァルブルクのニンフ、UP、査読無、497号、2014、37-44

高橋宗五、プレヒトの『注釈』の位置づけ、東京大学大学院総合文化研究科「超域文化科学紀要」、査読無、18号、2013、5-32

ゴチェフスキ ヘルマン、Traditionelle und westliche Musik als Identitätssymbole der Moderne: Die Nationalhymnen Japans und Koreas um 1900、OAG-Notizen Heft、査読無、12、2013、39-48

ゴチェフスキ ヘルマン、Nineteenth-Century Gagaku Songs as a Subject of Musical Analysis: An Early Example of Musical Creativity in Modern Japan¹、Nineteenth Century Music Review、査読有、10、2013、239-264

梶谷真司、近さと遠さー環境の中で共に生きること、東京大学大学院総合文化研究科「超域文化科学紀要」、査読無、18号、2013、55-67

石原あえか、ゲーテと木下杢太郎 皮膚科学との関わりを中心に、言語・情報・テキスト、査読無、Vol.20、2013、159-170

田中純、ヴァルブルクの「来たるべき書物」-ムネモシユネ・アトラス展に寄せて、UP、査読無、482号、2012、56-63

[学会発表](計 36 件)

長木誠司、シェーンベルクの音色旋律を用意するもの ヘルムホルツの音楽的音色、本科研主催シンポジウム「物理・生理・心理 三学を交差する音楽論 19世紀から20世紀初頭までの科学史をめぐって」、2014年12月6日、東京大学駒場キャンパス(東京都目黒区)

田中純、Dystopian Visions in Gilbert Clavel's An Institute of Suicide、ヨーロッパ・アヴァンギャルド・モダニズム学会第4回国際大会、2014年8月31日、ヘルシンキ(フィンランド)

梶谷真司、対話としての哲学の射程 グローバル時代の哲学プラクティス、高千穂大学連続講義「危機の時代と哲学の未来」、2014年10月14日、高千穂大学(東京都杉並区)

市野川容孝、Max Weber in Japan、関東社会学会、2014年6月22日、日本女子大学・目白キャンパス(東京都文京区)

石原あえか、Blick auf die Welt: Goethe und das "Gemälde der Natur"、デュッセルドルフ・ゲーテ博物館主催定例講演会、2014年9月17日、デュッセルドルフ(ドイツ)

市野川容孝、Another Way of Modernization and Sociology?: A

Critical Assessment of the
“Japanistic Sociology” in the 1920s
and ‘30s, The 28th ISA World Congress
of Sociology, 2014年7月19日、パシ
フィコ横浜(神奈川県・横浜市)
Hermann Gottschewski, “A Continuation
of Research by Other Means” ? Research
on Music in the Digital Age, NCTU
Digital Humanities Seminar, 2013年10
月25日、台湾國立交通大學(台湾)、
梶谷真司、生と死の歴史哲学 近代化に
よって得たものと失ったもの、
JENESYS2.0 中国大学生訪日団外務省訪
問セミナー、2013年9月24日、外務省
中央庁舎(東京都千代田区)
田中純、The Chthonic Architecture of
Gilbert Clavel: A Study on the
Relationship among Architectural,
Geographical and Bodily Imagination,
19th Jubilee International Congress of
Aesthetics, 2013年7月24日、ヤギエ
ウォ大学(ポーランド)
鍛冶哲郎、医学・生物学とゴットフリート・
ベンドドイツ語圏世紀転換期の文学
における<靈魂>の行方、本科研主催シ
ンポジウム「科学知の詩学」、2013年12
月7日、東京大学駒場キャンパス(東京都
目黒区)
石原あえか、日本におけるムラージュ技
師の系譜 伊藤有とその弟子たち、本科研
コロキウム「医学と芸術 近代皮膚科
学における教材と日独学術文化交流」、
2013年3月8日、東京大学駒場キャン
パス(東京都目黒区)
市野川容孝、W.グリーンジャーの精神医
学、本科研研究会、2012年7月21日、
東京大学駒場キャンパス(東京都目黒区)

〔図書〕(計 29 件)

佐藤恵子、ヘッケルと一元論、工作舎、
2015、410
石原あえか、近代科学と芸術創造所収「ド
レスデン衛星博覧会(1911/1930) - 二度
の国際博覧会に見る近代日独医学交流史、
行路社、2015、451(169 186)
竹峰義和、近代科学と芸術創造所収「犯
行現場としての心 G.W.パプスト『心の
不思議』をめぐって」、行路社、2015、
451(231 258)
鍛冶哲郎、近代科学と芸術創造所収「世
紀転換期ドイツ語圏における魂の行方」、
行路社、2015、451(217 230)
高橋宗五、陶酔とテクノロジーの美学所
収「技術と陶酔、演劇と祝祭 マックス・
ラインハルトの場合」、青弓社、2014、
281(222 247)
竹峰義和、陶酔とテクノロジーの美学所
収「「おまえはカリガリにならねばなら
ない」 - ヴァイマル映画における陶酔と
越境をめぐる一考察」、青弓社、2014、

281(46 - 64)
長木誠司、陶酔とテクノロジーの美学所
収「陶酔と無調 奏でられ、歌われ、酔
われる四重奏に向けて」、青弓社、2014、
281(153 172)
鍛冶哲郎、陶酔とテクノロジーの美学所
収「海の誘惑 身体への夢 G.ベンとS.フ
エレンツィにおける生物学と陶酔」、青弓
社、2014、281(84 108)
ゴチェフスキ ヘルマン、陶酔とテク
ロジーの美学所収「方法としての陶酔、
材料としての人間、芸術家としての総統
ヴァイマル共和国における国家社会
主義と「政治の美学化」」、青弓社、2014、
218(248 274)
田中純、陶酔とテクノロジーの美学所収
「アビ・ヴァ ルブルクにおける陶酔と
メランコリーの認識法」、青弓社、2014、
281(191 221)
市野川容孝、ソシオロジーの起源へ、白
水社、2013、249(237 249)
Yasutaka Ichinokawa、Eugenics in
Society: A Sociological & Historical
Consideration, Oxford UP, 2014、786(154
158)
梶谷真司、歴史における周縁と共生 女
性・穢れ・衛生、思文閣出版、2014、370(289
306)
田中純、死後に生きる者たち <オース
トリアの終焉>前後のウィーン展望、み
すず書房、2013、360(328 337)
長木誠司、日本の吹奏楽史 1869 2000、
青弓社、2013、208(162 168)
市野川容孝、社会学、岩波書店、2012、
186
田中純、冥府の建築家 ジルベール・ク
ラヴェル伝、みすず書房、2012、532

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://phiz.c.u-tokyo.ac.jp/~wissen/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鍛治 哲郎 (Kaji Tetsuro)

鎌倉女子大学・教育学部・教授

研究者番号：30135818

(2) 研究分担者

高橋 宗五 (Takahashi Sogo)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10134404

長木誠司 (Choki Seiji)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：50292842

田中純 (Tanaka Jun)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10251331

市野川容孝 (Ichinokawa Yasutaka)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：30277727

佐藤恵子 (Sato Keiko)

東海大学・総合教育センター・教授

研究者番号：50317757

ゴツェフスキ ヘルマン

(Gottschewski Hermann)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：00376576

梶谷真司 (Kajitani Shinji)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：50365920

石原あえか (Ishihara Aeka)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80317289

竹峰義和 (Takemine Yoshikazu)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：20551609